

風情ある街なみ生かし人呼ぼう

# 「泉佐野おとし」研究会

地元で発足

近世の風情を残す泉佐野市の旧市街地のにぎわいを取り戻すことを目指す「佐野町場活性化研究会」(寺崎重紘委員長)が発足した。メンバーは地元の住民や市職員、研究者の有志。点在する古い町屋の活用方法を考えたり、先駆的な自治体の取り組みを学んだりして、泉佐野の観光地としての魅力を掘り起し「おとし」の魅力を掘り起し「おとし」。

(加戸靖史)

南海泉佐野駅の北側。大通りから一本内側に入ると、木造の古い民家が立ち並ぶ一画が広がる。江戸時代に回船や醸造、綿織物など多彩な業種が栄えていく過程で、狭く入り組んだ路地が形成されたと言われる。

8月25日、江戸時代に

は、この地域の業者の屋敷だった一旧新川家住宅(同市本町)に十数人が集まり、研究会の第1回会合が開かれた。研究会副委員長の大阪市立天大学院の小長谷一之教授は、奈良市の平野地区や大阪市の平野地区など、町屋を生かした

まちづくりの先行例を紹介。古い蔵や商家が多い泉佐野は外国人にも魅力的だと説き、関西空港のトランジット(乗り継ぎ)客向けツアーができなかと提案した。

委員長で、泉佐野の旧市街地の活性化に取り組んできたNPO法人理事長でもある寺崎さんによると、街の将来への危機感がきっかけだった。

関空第2滑走路がオープンし、対岸のりんくうタウンは大型商業施設の進出が相次ぐ。一方、旧市街は高齢化が進み、商店街の人通りも少ない。「放っておけば泉佐野が平凡な街に変わってしまう恐れがある」との思いを募らせ、共鳴した地元町会長や市職員らも研究会に加わった。

今後2年ほどかけて研究を進め、一定の方向性を打ち出す考えだ。



古い街並みが残る旧市街地―泉佐野市本町で